肝炎ウイルス感染に関する研究

HBs抗原Carrierの母親の児に及ぼす影響

東京大学医学部小児科学教室
財満耕二　白木和夫
桜井迪朗　川名尚
吉原なみ子

目的

HBs 抗原陽性の母親から生れた児の予後を，昨年につづいて検討した。児の奇型，出生時の状態，その后の成長と発育，肝炎罹患状況について，臨床的観察と追跡調査を行なった。肝障害を有する母親についても検討し母体側の反応の差が，児に及ぼす影響についても検討した。姙婦の1～2%がcarrier であること，欧米では姙婦の急性肝炎がvertical transmissionの主な原因と考えられていることから，こうした点の解明が今後の予防対策の手がかりとなると考えた。

対象と方法

1）昭和44年4月より昭和51年10月までに本院産科で生れた児のうち母が姙娠中HBs 抗原陽性であったもの63例と，垂直感染の可能性のある急性肝炎，慢性肝炎で本院を受診した3例，姙娠中母が急性肝炎に罹患したもの3例（うち1例は非B型），母がHBs 陽性の肝硬変患者1例について，出生直後，あるいは，受診時より，経過を追って生長，発育，血清HBs 抗原，抗体，肝機能を追跡検討した。

受診しない例については，生長，発育，罹患状況などに関してのアンケートと共に来院の通知を出したが，実際に来院したのは，このうち7名のみであった。

結果と考察

1）肝炎ウイルスによる奇型などの発生；小児科で追跡し得た29例および呼び出しに応じて来院した7例では，奇型は認めない。母親が慢性肝炎で姙娠中急性増悪のみられた例は，鉗子分娩であったが，生後2週間の時点で，眼球の日没現象が見られたがまもなく消失した。肝硬変の母より生まれた児は，生後5ヶ月の時点で同じく日没現象が見られたがその後追跡し得ていない。

2）出生時の体重，在胎期間などの検討；

生下時体重，在胎期間は，大多数の例で標準と差がない。2500g 以下の低出生体重児は70例中3例であるが，うち1例は，母が肝硬変で姙娠33週に昏睡に陥り，帝切により体重1000gで出生し得た例で，HBs 抗原の為というより，高度の肝障害のためと考えるべきであろう。従って姙婦の血中HBs 抗原を原因とする早産ないし子宮内発育遅延への影響は全く認められなかった。高度肝障害のための早産例として，姙婦8ヶ月に非B型急性肝炎に罹患した例があり，35週，2650gで出生しておりHBs 抗原が直接早産，低出生体重の原因になるとは考えにくいことの傍証となると思われる。

3）児の成長と発育；

急性肝炎を発症し，発黄した2例は，肝炎の極期に体重増加の遅延があり種々の肝炎症状を示したが，発黄なく経過した2例は，全く臨床症状を欠くままに，肝機能の変化が見られた。この後者の2例は，体重増加の遅滞はなかった。

これ以外の例は，一般体重増加は順調である。1)の項で示した日没現象のある2例を除き，運動精神発達上異常のある例はない。

HBs 抗原の存在だけでは，児の成長発育そのものの変化は考えにくく，肝障害による間接的な影響（早産，低出生体重，ビリルビン処理の障害，分娩異常など）によるものの異常なら起り得ると考えられた。

4）母体側の要因

肝障害によるものは，前項で検討した。

肝障害の高度でない例では，児に対する影響は，奇型，発育成長の面では，肝障害のない母体と差はなかった。

肝障害が認められ，HBs 抗原を有した母親（急性肝炎３例，慢性肝炎２例）は，出産後２ヶ月ほどで，すべて無症候Carrier 化して，肝機能は正常となったが，HBs 抗原は消失していない。従って，急性肝炎が本当の意味でのそれであったのか，慢性肝炎の姙娠による急性増悪であったのか判断に苦しむ。前者であれば，姙娠中あるいは直后の急性肝炎は，慢性化，Carrier 化しやすい可能性が考えられる。

罹 患 状 況

臨床的に無症状のHBs carrier の母から生まれた児２８例のうち追跡調査で６例（21.4%）が，生后４ヶ月までにHBs 抗原陽性となり，そのうち２例が慢性肝炎の像を呈した。

急性肝炎と考えられた３例の母親から生れた児のうち１例は分娩時輸血を行い２ヶ月後に肝機能異常を示した例である。児が慢性肝炎となった。姙娠中に肝炎と診断された２例は，児への感染はない。

慢性肝炎の母から生れた児は，前記の如くHBs 抗原を認めていない。

肝硬変の母から生れた児は，転院のため．その後のfollow upができなかったが，転院の時点までは，HBs 抗原は認められなかった。

新生児黄疸は，母乳黄疸１例と，肝硬変の母の子の極小未熟児との２例に見られた。

新生児肝炎，関節炎，結節性動脈炎の症状を示す例はなかった。

要　　約

HBs 抗原陽性の母親から生れた児，及び出産後HBs 抗原持続陽性である母親から生れた児について，奇型，生下時の状態，その後の発達と成長，罹患状況を検討した。

1）外表奇型，及び知り得る範囲内で内臓奇型は認められなかったが，２例に日没現象を認めた。しかしこの２例は，HBウイルスや母体の肝障害ののの他にも，神経学的異常を起しうる理由があり，HBウイルスとの関連を意義づけるのはむずかしい。

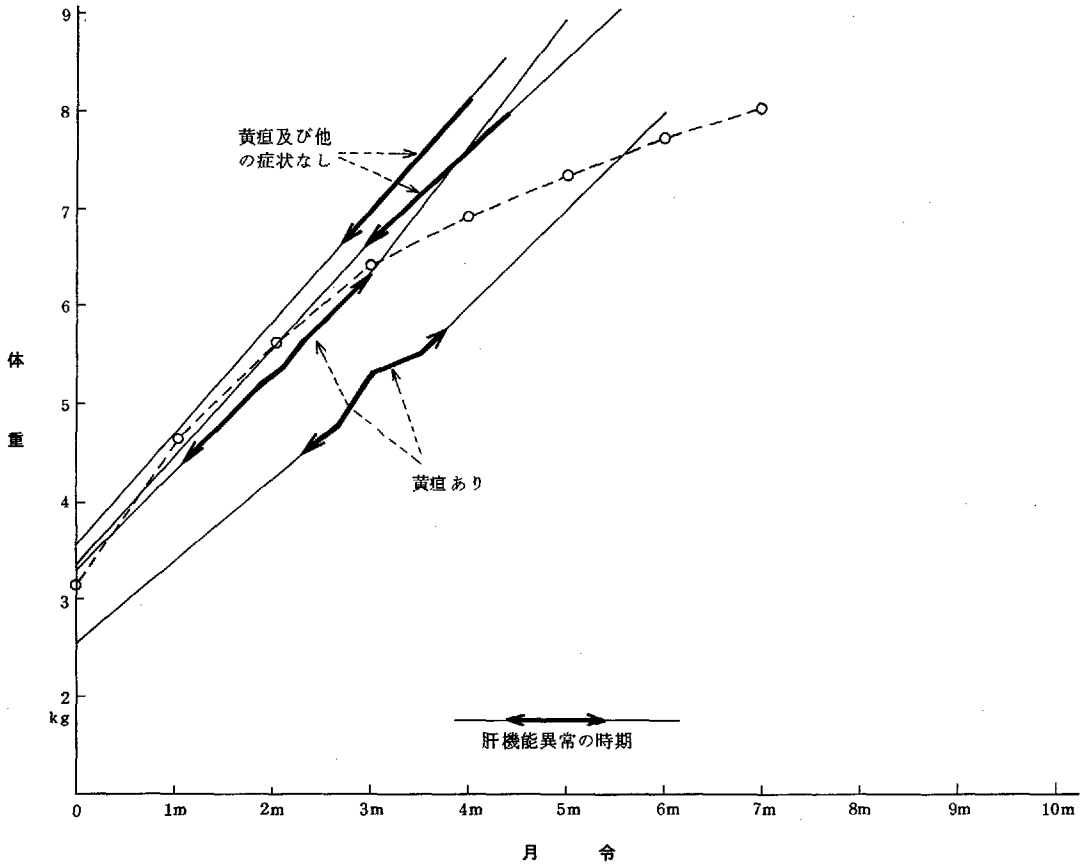
2）母の肝障害が軽度のもの，肝炎が姙娠初期にあった例は，児への発育に標準と差がないが，高度の肝硬変例，姙娠後期例では，早産，低出生体重が見られた。

3）児が，黄疸を伴う顕性の肝炎に罹患するときは，身体発育遅延がみられた。

4）母児ともに肝障害を示さない例は，HBs 抗原の有無にかかわりなく，児の体重増加は順調であり，精神運動発達も正常である。

5）新生児肝炎，関節炎．腎炎の症状を示す例は見られなかった。

急性肝炎発症児の体重曲線



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的

HBs 抗原陽性の母親から生れた児の予後を,昨年につづいて検討した。児の奇型,出生時の状態,その后の成長と発育,肝炎罹患状況について,臨床的観察と追跡調査を行なった。肝障害を有する母親についても検討し母体側の反応の差が,児に及ぼす影響についても検討した。姙婦の 1～2%が carrier であること,欧米では姙婦の急性肝炎が vertical transmission の主な原因と考えられていることから,こうした点の解明が今後の予防対策の手がかりとなると考えた。